

ハ刺しの原理に関する研究(第3報)
 曲がり効果とすくい目の大きさとの関係
 聖豊女子短大 豊間和子 O高橋純子 工藤悦子

目的 第2報では、布地のたて地にハ刺しを行なった場合の曲がり効果とハ刺し間隔の関係について検討した。その結果、刺し間隔が広くなると表地と芯地のなじみがすなわく不安定な状態になり、縫製上の形態やブルエツトに影響をあたえることが判った。また曲がり剛さが大きく刺し密度が小さくなるとそり返り状態がよくなり、刺し間隔と針目の長さが小さくなる程曲がり効果が大きくなることが認められた。本報は、たて地、よこ地、バイヤス地にハ刺しを行なった場合の曲がり効果とすくい目の大きさとの関係を追求する。

方法 試料は、前回と同様でウール100%の平織の表地と芯地を15cm正方形に裁断したものを2組、ハ刺しの糸は、針目に強くひびかない糸に注意しながらハ刺しを行なった。ハ刺し条件は、針目の長さ l と刺し間隔 g が前報と同じで、表地に与えるすくい目の大きさを0.1, 0.2, 0.4, 0.6cmに設定した。ハ刺し後の写真撮影および曲率効果の求め方は前報と同様であり、各々の値は目的に応じて統計処理を行ない関連性を検討した。

結果 布地のたて地、よこ地、バイヤス地にそれぞれの条件でハ刺しを行なった結果、バイヤス地の曲率効果が最も大きく、次いでよこ地、たて地の順であった。表地に与えるすくい目の大きさについては、すくい目が0.2cm(織糸3~4本)にした場合の曲率効果が最大で、次に0.1, 0.4, 0.6cmの順に小さかった。曲がり効果と布地の方向性には5%の水準で有意差が認められた。すくい目の大きさと布地の方向性については1%の水準で有意差が認められた。